

教育研究業績書

2025年05月07日

所属：食物栄養学科

資格：講師

氏名：絹田 皆子

研究分野	研究内容のキーワード
公衆衛生、予防医学、栄養教育	生活習慣病予防、地域住民、循環器疾患
学位	最終学歴
博士（医学）	大阪大学大学院医学系研究科 予防環境医学専攻

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. メディカルデータサイエンスイノベーター 養成科目（岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科 医歯科学専攻・博士課程）	2024年7月～2025年3月	これまでに携わった疫学研究を実例として示し、保健医療分野でのデータから新たな価値を創造するためのイノベーションにつながる研究の着想、調査・研究のデザイン、既存データの利活用、データ分析に関する基礎・基盤となる学習の機会を提供した。また、疫学や健康保健でのデータサイエンスのアプローチについての理解を深めることを目指した。
2. 社会医学入門（岡山大学医歯薬保健系・教養）	2022年4月～2025年3月	社会と医学医療との関係を学び、それぞれの専門性を理解しつつ、異なる職種や専門領域間での学際的な思考を育むことを目的とし、特に生活習慣の現状と対策や社会と健康に関する講義を担当した。履修生が自らの生活習慣を見直し改善するだけでなく、社会全体の健康問題を分析し、解決策を考える機会を提供した。
3. 公衆衛生学実習（岡山大学医学部）	2021年9月～2025年3月	地域における公衆衛生活動に参加する機会として、高齢者保健(介護老人福祉施設)と予防医学(健康管理センター)の実習先を担当した。学生が実際の現場で具体的な実践方法や公衆衛生を学ぶ機会となるよう、実習先との調整を図った。また、地域社会との連携を強化し、地域における健康増進活動に貢献することを目指した。さらに、ケースメソッドを用いた公衆衛生教育を実施し、学生の専門知識の向上および実践的なスキルの取得を目指した。
4. 予防医学（岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科 医歯科学専攻・修士課程(MPHプログラム)）	2021年9月～2025年3月	予防医学研究における研究デザインからデータ解析までのスキームを具体的に作成できることを目指した。主に、予防医学の基礎として、生活習慣病の予防および予防のための健康行動理論における基本的事項を講義し、これまでに携わった医学研究を具体例として示し、履修生の「研究力」向上を図った。
5. 公衆衛生学（岡山大学医学部）	2021年9月～2025年3月	医師国家試験の科目「公衆衛生学」で、国民栄養と食品保健を担当した。身近な「食」に関わる内容であるが、栄養政策や栄養疫学といった専門的な概念が含まれるため、管理栄養士の視点から、専門的な基礎知識をわかりやすく伝えることを目指した。また、実体験を通じて記憶を定着させることができると考え、例えば、日常生活で役立つ食品衛生の具体例を取り入れるなど、講義内容を実践的に理解しやすくなるよう工夫した。
6. 研究方法論応用（岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科 医歯科学専攻・博士課程）	2021年9月～2025年3月	疫学実践論の基礎として、健康と生活および健康行動理論を担当し、地域疫学・介入研究の実例を挙げながら、異なる職種や専門領域の履修生が共通の理解を深めることを目指した。講義で得た知識・研究方法を実践し、履修生が自身の研究展開に応用できる研究力を高めるためのグループディスカッションを実施した。
7. 社会医歯科学 社会医歯科学（岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科 医歯科学専攻・修士課程）	2021年5月～2025年3月	社会における医歯学の役割と社会との相互関係について、特に生活科学の観点から社会が健康に与える影響に関する基本的な知識の習得を目指した。また、修士課程の院生を対象とした講義であるため、これまでに携わった研究内容や方法を例に挙げ、研究方法論に日頃から関心を持ち、身近に感じてもらえるよう工夫した。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
8. 医学セミナー（チュートリアル）（岡山大学医学部）	2021年4月～2025年3月	学生自らが主体的に健康に関連する課題を設定し、調査・学習を通じて、課題解決に能動的に挑戦する学習習慣の習得を身につける指導を行った。また、学生相互および学生と教員との交流を深め、コミュニケーション能力の向上を図った。
9. 公衆衛生学概論（岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科 医歯科学専攻・修士課程）	2021年1月～2025年3月	公衆衛生学関連の課題解決のための基礎から応用・実践までの理解と思考を習得することを目指し、主として栄養学を基盤とし、食を含む生活環境を通じた生活科学と、ライフコースに応じた健康課題に関する講義を担当した。
10. 公衆衛生学Ⅰ・Ⅱ（岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科 医歯科学専攻・修士/博士課程）	2020年10月～2025年3月	履修生各々の研究テーマについて、研究デザイン、データ収集、統計解析、学会発表、そして論文執筆までの一連のプロセスを習得することを目指した。また、グループディスカッションを通じて、院生同士が相互に意見交換し、コミュニケーションを深めることで、リサーチマインドと人間性を兼ね備えた人材の育成を目指した。
11. 医学研究インターンシップ（岡山大学医学部）	2020年10月～2025年3月	毎年3か月間、3名の医学部生を担当した。医学部生には、IoT技術を活用した血圧・活動量・食事の調査および管理研究に積極的に参加してもらい、研究対象者の立場を体験することで、医学研究の意義と重要性を理解し、社会の行動規律と協調性の習得を促進し、リサーチマインドと人間性を兼ね備えた人材の育成を目指した。
12. 公衆衛生学（武庫川女子短期大学部非常勤講師）	2017年9月～2024年3月	履修生が「公衆衛生学」に興味を持ち、理解を深める楽しい講義を目指した。具体的には、既習内容を振り返り、教科書や資料を活用して答えを見つける機会を設け、正解を得た喜びを通して自信と学ぶ意欲を引き出すよう工夫した。また、講義内容をまとめた資料を配布し、重要な箇所はスライドを板書することで、履修生が記憶を定着させる支援を行った。さらに、毎回の講義前に前回の復習テストを実施し、理解を深める機会を提供した。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 甲南女子中学・高等学校卒業生講演会	2024年6月12日	甲南女子中学・高等学校の生徒約1,000人を対象に、自身の中学高校時代の経験談、現在の仕事、今後の目標などについて講演をした。また、現役の中高生から事前に集めた質問に答えることで、自分の体験談だけでなく、生徒たちの関心に応じた内容も含める工夫をした。
4 その他		
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 管理栄養士 2. 栄養士		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. アプリ「アスリブ」（株式会社NTTデータ関西）の「健康コラム」コンテンツの執筆	2024年4月現在	株式会社NTTデータ関西が開発したアプリ「アスリブ」内で週1回更新される「健康コラム」を月4回のペースで執筆中である。
2. 益田研究参加者を対象とした「参加者の集い2023」の講師	2023年12月9日	益田市と連携し、益田研究の成果報告の一環として、益田研究参加者（約60名）を対象にこれまでの研究成果を報告し、参加者と研究者との意見交換会を開催した。その意見交換会において、研究者（管理栄養士）の

職務上の実績に関する事項				
事項		年月日	概要	
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
3.Hypertension Researchの編集部が選定した2022年のExcellent Paper	2023年9月15日	立場から登壇し、参加者と意見交換を行った。 「Kinuta M, et al. Associations of indoor and outdoor temperatures and their difference with home blood pressure: the Masuda study. Hypertension research.2022;46(1):200-207.」の論文が、Hypertension Researchの編集部が選ぶ2022年のExcellent Paperとして選ばれ、Mogi M, et al. 2023 update and perspectives.Hypertens research.2024 ;47:6-32.に掲載された。		
4. 益田研究対象地域の広報誌「広報ますだ(2月号)」に研究成果を寄稿	2023年2月	益田研究の成果報告の一環として、血圧管理における血圧測定時の室温管理の重要性を報告した研究 「Associations of indoor and outdoor temperatures and their difference with home blood pressure: The Masuda Study.」の概要を広報誌「広報ますだ 令和5年(2月号).P27.」に寄稿した。		
5. 令和4年度岡山県栄養改善協議会研修会の講師	2022年6月16日	令和4年度岡山県栄養改善協議会研修会において、岡山県内栄養委員(約150名)を対象に、健康寿命の延伸を目指したフレイル予防に関する講演「いきいきライフのすすめ“フレイル予防”をテーマにー第二部:実践のすすめー」を担当し、フレイルと栄養について講義をした。		
4 その他				
1. 経済産業省および日本医療研究開発機構(AMED)事業「デジタル技術を活用した血圧管理に関する指針2025」作成におけるシステムティック・レビュー委員	2023年8月	経済産業省および日本医療研究開発機構(AMED)事業「デジタル技術を活用した血圧管理に関する指針2025」作成にあたり、「尿ナトリウム計・ナトリウム計」におけるシステムティック・レビュー委員の一員として参画した。		
2. 第14回日本循環器病予防学会奨励賞	2023年6月4日	一般社団法人日本循環器病予防学会		
3. 緒方賞	2023年1月29日	岡山公衆衛生学研究会		
4. 動脈硬化性疾患ガイドライン2022年版のシステムティック・レビュー委員	2022年7月1日ガイドライン出版	第3章「動脈硬化性疾患予防のための包括的リスク管理」の「3.健康行動理論に基づく保健指導」において、システムティック・レビュー委員の一員として参画した。		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 茶の機能：ヒト試験から分かった新たな役割	共	2013年11月	農山漁村文化協会	著者：丸山（絹田）皆子、磯博康 担当部分：p229-p233 第2章 疾病予防機能、2-5 抗糖尿病作用(2)疫学, 臨床②糖尿病発症リスク茶の飲用と生活習慣病との関連について、糖尿病と循環器疾患に関する疫学的分析を行った。緑茶の飲用、そしてコーヒー等を含めたカフェイン摂取が、糖尿病発症のリスクを減少させる可能性が示された。緑茶の飲用は、循環器疾患死亡のリスクを減少させる可能性が示された。緑茶の摂取頻度が多いほど、循環器疾患と脳卒中(脳梗塞、脳内出血を含む)発症のリスクが低下する可能性が示された。
2 学位論文				
1.Trends in sudden cardiac death and its risk factors in Japan from 1981 to 2005: the Circulatory Risk in Communities Study (CIRCS).	共	2012年3月	BMJ Open 2012;2:e000573	Maruyama(Kinuta) M, Ohira T, Iso H, et al. 長期間循環器疾患の疫学調査を実施している一般地域住民を対象に、心臓突然死発症率およびその危険因子の推移について検討した。心臓突然死発症率は、1981～1995年までは低下傾向が認められたが、1995年以降その傾向は認められず明らかな変化はなかった。糖尿病有病率が増加傾向にあるため、わが国における、心臓突然死発症率が今後増加に転じる可能性も考えられる。今後も調査を継続することが重要である。
3 学術論文				
1.The association between objectively	共	2025年4月	J Hum Hypertens. 2025 Apr 3. doi : 10.1038/s41371	Kinuta M, Hisamatsu T, Kanda H, et al. IoT技術を用いて血圧、身体活動を管理している一般住民を対象(368人;平均年齢54歳,女性59%)に、家庭血圧と同日の身体活動時間

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
measured physical activity and home blood pressure: a population-based real-world data analysis	共	2025年2月	-025-01014-8.	および歩数を用いて家庭血圧値との関連を検討した。適度な運動（中等度以上）と歩数の増加は、血圧を下げる効果があることが示唆された。
2.Effectiveness of self-monitoring devices measuring the urinary sodium-to-potassium ratio, urinary salt (sodium) excretion, or salt concentration in foods for blood pressure management: a systematic review and meta-analysis			Hypertens Res. 2025 Feb 13. doi : 10.1038/s41440-025-02124-z	Hisamatsu T, <u>Kinuta M</u> , Arima H, et al. 尿中Na/K比や塩分摂取量を測定する自己モニタリング機器が、成人の血圧管理に効果があるかを検討したシステマティックレビュー・メタアナリシスでは、8件のRCT（計1442名）を解析した。結果、介入群は収縮期血圧で約2.5mmHg、拡張期血圧で約1.4mmHg低下し、尿中Na/K比やナトリウム排泄量も改善した。異質性は高かったが、機器は食事改善を促し、血圧管理に有効な手段となり得ることが示唆された。
3.ChatGPT Responses to Clinical Questions in the Japan Atherosclerosis Society Guidelines for Prevention of Atherosclerotic Cardiovascular Disease 2022.	共	2024年10月	J Atheroscler Thromb. 2024 Oct 30. doi: 10.5551/jat.65240.	Hisamatsu T, <u>Kinuta M</u> , Kanda H, et al. この研究では、ChatGPT（バージョン3.5）が「日本動脈硬化学会ガイドライン2022」の臨床的疑問（CQs）に対して、どれほど正確かつ一貫性のある回答ができるかを評価した。日本語・英語の質問に対する回答を専門家が評価した結果、特に前景質問（FQs）で高い正確性と再現性が確認された。ChatGPTは、ガイドラインの迅速な理解や医療判断の補助に役立つ可能性がある。
4.Home blood pressure measurement days and changes in urinary sodium-to-potassium ratio, estimated salt and potassium intakes, and blood pressure: 1-year prospective study.	共	2024年8月	Blood pressure monitoring. 2024; 29:188-194.	<u>Kinuta M</u> , Hisamatsu T, Kanda H, et al; the Masuda Study Research Group. 家庭血圧測定管理を実施している一般地域住民を対象（209人;平均年齢55.9歳,女性56.5%）に、家庭血圧測定日数の増加に伴い、尿中ナトリウム/カリウム（Na/K）比、食塩摂取量と家庭血圧値は低下し、K摂取量は増加するという仮説を立て、1年間の前向き観察的検討を行った。食塩摂取量、朝の収縮期と夕の拡張期血圧値は、測定日数の増加に伴い有意に低下した。継続的な家庭血圧測定は、食習慣の改善を通じた減塩にも寄与する可能性が示唆された。
5.High blood pressure in childhood and adolescence.	共	2024年1月	Hypertension research. 2024;47 (1):203-205.	Hisamatsu T, <u>Kinuta M</u> . 東京都の中学校3校と高等学校4校の健康診断結果を用いて、2000～2019年までの12～18歳の日本の青少年における血圧値と高血圧有病率の傾向を示した論文（Azegami et al.,Hypertens Res.2024;47:184-94）に関するEditorialの執筆に補助的に携わった。
6.Long-Term Effect of Smoking Ban Legislation on Hospitalization for Acute Coronary Syndrome.	共	2023年10月	Circulation Journal.2023;87 (11):1686-1688.	Hisamatsu T, <u>Kinuta M</u> . 日本心臓血管疾患総合登録システム（JROAD-DPC）のデータを用いて、兵庫県と大阪市の一部地域（神戸市、阪神間およびその他の地域）で2013年に禁煙法が施行されて以来、7年間の急性冠症候群による入院の傾向を推定した論文（Nakai et al.,Circ J.2023;87:1680-85）に関するEditorialの執筆に補助的に携わった。
7.At-risk internet addiction and related factors among senior high school teachers in Japan based on a Nationwide survey	共	2023年7月19日	Neuropsychopharmacology reports. 2023;43(4):553-560.	Fukuda M, <u>Kinuta M</u> , Kanda H, et al. 日本全国の高等学校を対象に実施した質問票調査(2017年)を用いて、高等学校教員(男性2,088人,女性1,098人)のインターネット依存症(IA)リスクの特徴とその関連要因について評価した。高校教員の約7%がIAリスクにさらされており、特に年齢が若い教員や、インターネット利用時間が長い教員がIAリスクと関連していることが示された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
8.人口動態調査の二次利用提供データを用いたICD-10小分類相当別の心疾患死亡率に関する長期的動向の県間比較における課題点について.	共	2023年7月	厚生 の指標. 2023 ;70(7):31-37	絹田皆子, 今野弘規, 祖父江友孝 他. 平成29年度環境省委託事業「放射線健康管理・健康不安対策事業」において、1995～2015年の人口動態調査の二次利用提供データを使用し、「心疾患(高血圧性を除く)」における内訳病名別死亡率の県間比較とその課題点を検証した。「心疾患」の内訳病名には県ごとに異なる頻度が見られ、1995年以降20年間で判定基準が一貫していなかったことから、死亡率の長期的動向や県間比較において内訳病名を利用することは適切でないことが示唆された。
9.Associations of indoor and outdoor temperatures and their difference with home blood pressure: The Masuda Study.	共	2022年10月14日 Published	Hypertension research.2022;46 (1):200-207.	Kinuta M, Hisamatsu T, Kanda H, et al. 家庭血圧測定管理を実施している地域住民(352人;平均年齢49.8歳, 女性46.0%)を対象に、2年間の家庭血圧と、血圧測定時に同時計測される室温、血圧測定と同時時間帯の外気温を用いて、家庭血圧と室温・外気温との関係を検討した(血圧測定回数は朝;82,900回,夕;66,420回)。外気温より室温の方が家庭血圧に与える影響が大きかった。血圧管理には、血圧測定時の室温管理がより重要であることが示唆された。
10.Impact of Evacuation on the Long-Term Trend of Metabolic Syndrome after the Great East Japan Earthquake.	共	2022年8月2日 Published	International Journal of Environmental Research and Public Health. 2022;19(15):9492.	Eguchi E, Kinuta M, Ohira T, et al. National Data Base(NDB)を用いて、2008～2017年に特定健康診査を受診した40～74歳の福島県民(約33～44万人/年間)を対象に、東日本大震災前後の福島県におけるメタボリックシンドロームの有病率の長期的動向を避難地域別、他地域別に調べた。メタボリックシンドローム有病率は、特に避難地域で急増し、その後6,7年続いたことから、大災害後、特に避難地域において、男性と高齢者の長期的なモニタリングと生活習慣病の予防対策が必要であることが示唆された。
11.Relationship between Health Counselor Characteristics and Counseling Impact on Individuals at High-Risk for Lifestyle-Related Disease: Sub-Analysis of the J-HARP Cluster-Randomized Controlled Trial	共	2022年5月24日 Published	International Journal of Environmental Research and Public Health. 2022;19(11):6375.	Noguchi M, Kinuta M, Iso H, et al. 生活習慣病重症化ハイリスク者(8,975人,40～74歳)の医療機関受診における保健指導者の特性に関する影響を検証した。累積受療率が最も高かったのは保健師であり、次いで看護師、管理栄養士であった。保健師の専門知識、スキル、経験が保健指導の有効性を高める可能性が示唆された。
12.Effect of Coronavirus Disease 2019 Pandemic on Physical Activity in a Rural Area of Japan: The Masuda Study	共	2021年3月5日 Published	Journal of Epidemiology. 2021;31(3):237-238.	Hisamatsu T, Kinuta M, Kanda H, et al. IoT技術を用いて血圧、身体活動を管理している一般住民(242人,20～74歳)を対象に、WHOのCOVID-19緊急事態宣言前後の歩数を調査した。平均1日歩数は、宣言から1週間以内で宣言前の歩数と比較して6.4%(325歩)減少、次週には宣言前と比較して19.6%(1,000歩)減少、宣言の2週間後ではほぼ基準レベルまで回復、全国的な緊急事態宣言から1週間では9.4%(482歩)減少したが、翌週には回復した。その後、宣言が解除されるまで顕著な変化はなかった。
13.Japan Trial in High-Risk Individuals to Enhance Their Referral to Physicians (J-HARP)-A Nurse-Led, Community-Based Prevention Program of Lifestyle-Related Disease.	共	2020年4月5日	Journal of Epidemiology. 2020;30(4):194-199.	Noguchi M, Kinuta M, Iso H, et al. 本研究は、生活習慣病重症化ハイリスク者(介入群;8,977人,対照群;6,733人)を対象に、受療行動促進モデルに基づく保健指導の有効性を検証する研究である。理論に基づいた保健指導の標準化、実施のモニタリング、クラスターランダム化による体系的なデータ収集、そして、多数の参加者により、ハイリスク者の医療機関受診率や生活習慣病に関連する複合アウトカムの累積発症率の低下に関する研究仮説を検証することが可能となる。
14.Association	共	2019年5月	Journal of	Maruyama K, Kinuta M, Iso H, et al.

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
between vitamin B group supplementation with changes in % flow-mediated dilatation and plasma homocysteine levels: a randomized controlled trial.	共	2014年10月	Clinical Biochemistry and Nutrition. 2019 ;64(3):243-249.	40～65歳におけるメタボリックシンドロームリスク因子が1つ以上有する者に対して、低用量のビタミンB6、B12、葉酸が含まれたマルチサプリメントを2ヶ月間追加摂取させ、血管内皮機能への影響についての介入研究を行った。その結果、血漿ホモシステイン値の有意な低下を示した。
15.C-reactive protein levels and risk of disabling dementia with and without stroke in Japanese: the Circulatory Risk in Communities Study (CIRCS).			Atherosclerosis. 2014;236(2):438-43.	Chei CL, <u>Maruyama(Kinuta) M</u> , Iso H, et al; CIRCS Investigators. 一般地域住民を対象に長期間循環器疾患の疫学調査を実施しているCIRCSにおいて、高感度(hs)CRPと介護を要する認知症リスクとの関連についてコホート内症例対照研究(平均年齢63歳, 症例:275人, 対照:550人)による検討を行った。その結果、脳卒中既往のある認知症について他の危険因子とは独立にhsCRP値が高いほどリスクが高くなる有意な関連がみとめられた。
16.Risk factors for sudden cardiac death among Japanese: the Circulatory Risk in Communities Study.		2012年6月	Journal of hypertension 2012, 30(6), 1137-43	Ohira T, <u>Maruyama(Kinuta) M</u> , Iso H, et al. 一般地域住民を対象に長期間循環器疾患の疫学調査を実施しているCIRCSにおいて、日本人における既知の心血管疾患危険因子と心臓突然死(SCD)との関連を検討するために、コホート内症例対照研究(SCD:239人, 対照:717人)を行った。その結果、因果関係を判断することはできないものの、高血圧、重度のST-T異常、喫煙や糖尿病がSCD発生率と有意に関連することが示されたが、BMIや高脂血症とSCDとの関連はみられなかった。
17.加速度センサーにより測定した身体活動量の栄養評価指標としての意義	共	2010年5月	日本病態栄養学会誌. 2010;13(2)163-170.	丸山(絹田) 皆子, 内藤義彦, 磯博康 他. 栄養障害に陥っていた5例の入院患者を対象として、加速度センサー(active tracer AC-200R)を用いて身体活動量を自発的体動の加速度として測定し、栄養指標の有用性について検討した。累積加速度の変化と栄養指標である血清総たんぱく・血清アルブミン・血清コリンエステラーゼの変化との間には、正の相関をもって変化したという結果が得られたことから、累積加速度は栄養状態を反映する指標となる可能性が示された。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 季節ごとの家庭血圧と頭部 MRI 上の無症候性脳血管障害との関連：益田研究 2019 -2023.	単	2024年5月	第60回日本循環器病予防学会総会. 東京	三谷理貴, 久松隆史, 絹田皆子 他. 島根県益田市の健常一般住民から、2019年5月～2023年9月の間、毎月5回以上かつ1年以上継続して家庭血圧を測定した236人(平均年齢57歳, 女性48%)を対象に、家庭血圧と頭部MRI上の脳血管障害との関連を季節ごとに検討した。春、夏、秋、冬いずれの季節においても家庭収縮期血圧高値は頭部MRI上の脳血管障害と関連したが、その程度は同等であり、季節に関係なく家庭血圧を測定することの重要性が改めて示された。
2. 家庭血圧測定日数と尿Na/K比、推定食塩・カリウム摂取量の変化に関する1年間の前向き研究：益田研究.		2023年12月	第35回血圧管理研究会. 京都	絹田皆子. 家庭血圧測定管理を実施している一般地域住民を対象(209人;平均年齢55.9歳, 女性56.5%)に、家庭血圧測定日数の増加に伴い、尿中ナトリウム/カリウム(Na/K)比、食塩摂取量と家庭血圧値は低下し、K摂取量は増加するという仮説を立て、1年間の前向き観察的検討を行った。食塩摂取量、朝の収縮期と夕の拡張期血圧値は、測定日数増加に伴い有意に低下した。継続的な家庭血圧測定は、食習慣の改善を通じた減塩にも寄与する可能性が示唆された。
3. 中学・高等学校教員のワーク・エンゲージメントと心理的状	共	2023年11月	第82回日本公衆衛生学会総会. つくば	土江梨奈, 絹田皆子, 神田秀幸 他. 全国学校便覧から無作為に抽出された中学・高等学校の教員に匿名の質問票調査に回答した3160人(男性62%, 中学校48校, 高等学校64

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
況との関連.				校)(有効回答率19.9%)の結果を用いて、学校教員のワーク・エンゲージメント(WE)の現状と関連要因を検討した。学校教員のWEは、男性である、年間11日以上の有給取得、不安等の心理的状態、インターネット行動嗜癖が関連していた。
4. 地域住民における1年後の飲酒状況の変化が家庭血圧指標に与える影響に関する研究: 益田研究.	共	2023年10月	2023年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会. 岡山	絹田皆子, 久松隆史, 神田秀幸 他. 地域住民における1年間の追跡データを用いて、飲酒状況の変化(簡易型自記式食事歴法質問票による食事調査)と家庭血圧平均値および血圧変動性との関連を検討した。解析対象者180人の1年後の飲酒状況の変化は、“増えた”群31人、“減った”群31人、“変わらなかった”群60人、“飲まないまま”群58人であった。飲酒量が一定でなく、ビンジドリンクを含む飲酒量の増減のある者の方が血圧管理上注意を要する可能性が示唆された。
5. 家庭血圧測定日数と随時尿を用いた尿Na/K比、推定一日食塩・カリウム摂取量の変化に関する1年間の前向きパイロット研究: 益田研究.	共	2023年9月	第45回日本高血圧学会総会. 大阪	絹田皆子, 久松隆史, 神田秀幸 他. 家庭血圧測定管理を実施している一般地域住民を対象(209人; 平均年齢55.9歳, 女性56.5%)に、家庭血圧測定日数の増加に伴い、尿中ナトリウム/カリウム(Na/K)比、食塩摂取量と家庭血圧は低下し、K摂取量は増加するという仮説を立て、1年間の前向き観察的検討を行った。食塩摂取量、朝の収縮期と夕の拡張期血圧は、測定日数の増加に伴い有意に低下した。継続的な家庭血圧測定は、食習慣の改善を通じた減塩にも寄与する可能性が示唆された。
6. 一般住民における客観的評価に基づく身体活動と家庭血圧との関連: 益田研究.	共	2023年9月	第45回日本高血圧学会総会. 大阪	田邊莉奈, 絹田皆子, 神田秀幸 他. IoT技術を用いて血圧、身体活動を管理している一般住民を対象(375人; 平均年齢54歳, 女性56%)に、家庭血圧と同日の身体活動時間および歩数を用いて家庭血圧値との関連を検討した。座位時間を減らし、1日10分からでも活動時間を増やすことは、家庭血圧値の上昇抑制に寄与する可能性がある。また、その活動強度は強いほどその効果が大きいことが示唆された。
7. 地域住民における家庭血圧測定アドヒアランスとその関連要因の検討1年間の測定値に基づくトラジェクトリー分析.	共	2023年9月	第45回日本高血圧学会総会. 大阪	福田茉莉, 絹田皆子, 神田秀幸 他. 1年間益田研究に参加した者(計567人; 男性58.3%, 平均年齢49.1歳)を対象に、参加者の測定アドヒアランスパターンに関連する要因を検討した。測定パターンの異なる4グループ(1: 早期中止, 2: 緩やかに減少, 3: 中アドヒアランス, 4: 高アドヒアランス)が抽出された。グループ4に対してグループ1は年齢が若かったことから、益田研究参加者の家庭血圧測定の習慣化、特に壮年期初期の参加者への血圧管理支援の重要性が示唆された。
8. 季節毎の家庭血圧と無症候性微小脳血管障害との関連: 益田研究.	共	2023年2月1-3日	第33回日本疫学会学術総会. 浜松	久松隆史, 絹田皆子, 神田秀幸 他. IoT技術を活用し長期にわたり家庭血圧を評価している益田研究から、家庭血圧と頭部MRIで評価された無症候性の微小脳血管障害との関連を季節毎に検討した。春、夏、秋、冬いずれの季節においても家庭収縮期血圧高値は無症候性微小脳血管障害と関連したが、その程度は同等であった。季節に関係なく家庭血圧を測定・管理することの重要性が示唆された。
9. Associations of environmental temperatures and home blood pressure: The Masuda study.	共	2022年10月	International Society of Hypertension 2022. Kyoto	Kinuta M, Hisamatsu T, Kanda H, et al. 家庭血圧測定管理を実施している地域住民(352人; 平均年齢49.8歳, 女性46.0%)を対象に、2年間の家庭血圧と、血圧測定時に同時計測される室温、血圧測定と同時時間帯の外気温を用いて、家庭血圧と室温・外気温との関係を検討した(血圧測定回数は朝: 82,900回, 夕: 66,420回)。外気温より室温の方が家庭血圧に与える影響が大きかった。血圧管理には、血圧測定時の室温管理がより重要であることが示唆された。
10. 地域住民のCOVID-19流行禍における身体活動量の推移: 益田研究.	共	2022年10月	第81回日本公衆衛生学会総会. 山梨	谷口かおり, 絹田皆子, 神田秀幸 他. 島根県内のまん延防止等重点措置が適用となった2022年1月27日~2月20日(238人, 男性44%)とCOVID-19流行前2020年1月27~2月20日(187人, 男性48%)の身体活動量調査からCOVID-19流行前・流行禍における歩数の推移とその関連要因を検討した。まん延防止等重点措置の期間は平均歩数が減少し、特に休日の歩数が減少した。若年層や女性ほど歩数が減少しており、子育て、勤労世代がまん延防止重点措置による外出自粛等の影響を受けていることが考えられる。
11. 高血圧と社会的要因	共	2022年10月	第81回日本公衆衛生学会総会. 山梨	福田茉莉, 絹田皆子, 神田秀幸 他.

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
との関連：就労状況に注目して、			生学会総会. 山梨	益田研究の参加者(334人, 平均年齢54.2歳, 男性48.8%)を対象に、社会的要因、特に世帯状況や就労状況と高血圧との関連を検討した。職種と高血圧との間に関連が見られた。第二次産業従事者(主に建設業や製造業)に高血圧者が多く、事業場単位での疾病予防・健康増進教育が重要であることが示唆された。
12. 地域におけるIoT 高血圧管理研究が高血圧有病率・認知率・治療率・管理率に与える影響。	共	2022年10月	第81回日本公衆衛生学会総会. 山梨	久松隆史, 絹田皆子, 神田幸幸 他. 月に5日以上の有効な家庭血圧測定値を有する地域住民について、2019年11月(313人, 平均年齢48歳, 男性63%)、2020年11月(228人, 平均年齢55歳, 男性52%)、2021年11月(248人, 平均年齢54歳, 男性51%)の家庭血圧値に基づいて、高血圧の有病率・認知率・治療率・管理率の経時的推移を行った。有病率は2019年から2021年まで43%と高水準が持続し、認知率・治療率は2019年から2021年にかけて大幅に改善したが、管理率は依然低値のままであった。
13. 青少年者におけるゲームに対する社会的対応の東アジアの動向とわが国の課題。	共	2022年10月	第81回日本公衆衛生学会総会. 山梨	神田幸幸, 絹田皆子, 久松隆史 他. 文献調査をもとに、2005年以降の青少年者におけるゲーム利用に関する規制内容(利用時間, 利用時刻, 曜日)について、韓国・中国・日本の状況を検討した。韓国は規制を緩和する方向へ、中国は規制を強化する方向の対策を取っている中、わが国は国レベルのルールがない状況であることが明らかとなった。わが国においてゲーム障害とそれに関連する疾患予防の側面から、青少年者のゲームに対する社会的対応が求められると考えられた。
14. コロナ禍でわが国の国民の飲酒量は減ったのか?	共	2022年9月	2022年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会. 宮城	神田幸幸, 絹田皆子, 久松隆史 他. 2020年の酒類販売量等の統計データをもとに、アルコールメーカーおよびアルコール業界団体の2020年報告とし、その売り上げ前年比(2019年比)から販売実績量に基づいて、コロナ禍で国民の飲酒量はどうか変化したのかを検討した。コロナ禍で国民の飲酒量は大きく変化しなかったことが明らかとなった。
15. 家庭血圧変動と食事摂取状況に関する検討：益田研究	共	2022年6月	第76回 日本栄養・食糧学会大会. 兵庫	絹田皆子, 中畑典子, 神田幸幸 他. 家庭血圧測定管理を実施している地域住民(264人, 平均年齢51.9歳, 男性53.4%)を対象に、簡易型自記式食事歴質問票から推定された栄養素・食品群摂取量と家庭血圧変動性との関連を検討した。血圧変動性は、アルコール量と正の関連、果物類と負の関連を示し、家庭血圧平均値は、ナトリウム、食塩相当量、アルコール量と正の関連、緑黄色野菜と果物類と負の関連を示した。血圧平均値のみならず血圧変動性の管理も果物の積極的摂取や節酒の重要性が示唆された。
16. 持続可能で健康的な食習慣の実現に向けたヘルスプロモーション戦略	共	2022年6月	第58回日本循環器病予防学会学術集会. 栃木	飯塚真理子, 絹田皆子, 大塚礼 他. システム・ダイナミクス理論の定性モデルである因果ループ図を作成し、それをもとに、社会生態学的モデルの観点からヘルスプロモーション戦略を検討した。個人の食習慣にとどまらず、それを取り巻く社会環境面の変化も踏まえた目標を設定することが可能である。個人間・政策レベルの4目標が抽出され、各レベルで目標達成に向け実践することが、SDGsの目標達成にも寄与することが期待される。
17. 2年間の前向き地域研究からみた室温・外気温が家庭血圧に与える影響 益田研究	共	2022年1月	第32回日本疫学会学術総会. 千葉	絹田皆子, 久松隆史, 神田幸幸 他. 2019年4月～2021年3月までの2年間の経時的家庭血圧測定データを用いて、男女279人(平均年齢57歳, 男性56%)を対象に、家庭血圧に与える測定時の室温および外気温の影響について、一般化線形混合モデルを用いて検討した。家庭血圧に与える影響は、外気温より測定室温の方が大きかった。血圧管理には、室温管理がより重要であることが示唆された。
18. 家庭血圧に与える測定室温・外気温の影響～2年間の前向き地域研究～：益田研究。	単	2021年11月	第33回血圧管理研究会. 京都	絹田皆子. 2019年4月～2021年3月までの2年間の経時的家庭血圧測定データを用いて、男女279人(平均年齢57歳, 男性56%)を対象に、家庭血圧に与える測定時の室温および外気温の影響について、一般化線形混合モデルを用いて検討した。家庭血圧に与える影響は、外気温より測定室温の方が大きかった。血圧管理には、室温管理がより重要であることが示唆された。
19. 地域におけるIoT高血	共	2021年11月	第80回日本公衆衛	久松隆史, 絹田皆子, 神田幸幸 他.

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
圧管理研究が高血圧有病率・認知率・治療率・管理率へ与える影響			生学会総会. 東京	月に5日以上の有効な家庭血圧測定値を有する地域住民について、2019年11月(313人, 平均年齢48歳, 男性63%)および2020年11月(228人, 平均年齢55歳, 男性52%)の家庭血圧値に基づいて、高血圧の有病率・認知率・治療率・管理率の推移を比較した。2019年の有病率は高く、認知率は半数未満、管理率は極めて低かった。2020年の有病率は変化がなかったものの、認知率・治療率は大幅に改善し、管理率はわずかに向上した。
20. 地域一般住民における自己採血型簡易血液検査(指先採血)の導入と実施状況	共	2021年11月	第80回日本公衆衛生学会総会. 東京	神田秀幸, 絹田皆子, 岡村智教 他. 地域一般住民を対象に指先採血キット(DEMECAL血液検査セット(メタボリックシンドローム&生活習慣病セルフチェック)(株式会社 リージャー))による血液検査を導入し、その実施状況や検体エラーの実態を把握した。一般住民の指先採血参加同意率は、およそ4割であり、同意者のうち、約6割が自宅実施者であった。また、診療情報提供書発行対象者は同意者のうち4割超であった。血液量不足などの検体エラーは同意者の約5%にみられた。
21. 未受療重症化ハイリスク者における受療の必要性認識と医療機関受療率との関連に対する保健指導形態の影響：J-HARP	共	2021年5月	第57回日本循環器病予防学会学術集会	田中真理, 絹田皆子, 磯博康 他. 生活習慣病重症化ハイリスク者に対して行った受療行動促進モデルに基づく保健指導に関して、実施形態、実施時期、実施回数別にみた医療機関累積受療率との関連を検討した。重症化ハイリスク者の医療機関受療率を高める要因は、保健指導実施形態が訪問または面談、電話である、初回保健指導を45日以内に実施するなど初動を早める、保健指導を複数回実施することが示された。
22. 東日本大震災前後のメタボリックシンドロームの長期動向に関する避難の影響：NDB特定健診データを用いた検討	共	2021年5月	第57回日本循環器病予防学会学術集会	江口依里, 絹田皆子, 大平哲也 他. National Data Base(NDB)を用いて、2008～2017年に特定健康診査を受診した40～74歳の福島県民(約33～44万人/年間)を対象に、東日本大震災前後の福島県におけるメタボリックシンドロームの有病率の長期的動向を避難地域別、他地域別に調べた。メタボリックシンドローム有病率は、特に避難地域で急増し、その後6,7年続いたことから、大災害後、特に避難地域において、男性と高齢者の長期的なモニタリングと生活習慣病の予防対策が必要であることが示唆された。
23. 人口動態統計を用いた死亡率の長期的動向の県間比較における課題。	共	2019年1月	第29回日本疫学会学術総会. 東京	絹田皆子, 今野弘規, 祖父江友孝 他. 平成29年度環境省委託事業「放射線健康管理・健康不安対策事業」において、1995～2015年の人口動態調査の二次利用提供データ使用し、「心疾患(高血圧性を除く)」における内訳病名別死亡率の県間比較とその課題点を検証した。「心疾患」の内訳病名には県ごとに異なる頻度が見られ、1995年以降20年間で判定基準が一貫していなかったことから、死亡率の長期的動向や県間比較において内訳病名を利用することは適切でないことが示唆された。
24. 学童期から思春期の肥満に関連する生活習慣の検討 (第2報)	共	2018年10月	第39回日本肥満学会. 神戸	野口緑, 絹田皆子, 磯博康 他. 兵庫県尼崎市で実施している尼っこ健診結果を用い、11歳と14歳に健診を受診した対象者において、11歳の生活習慣と14歳の肥満度及び11歳から14歳時にかけての肥満度の変化との関連について重回帰分析を行った。学童期から思春期に至る肥満の予防と改善には、女子では、11歳の就寝時刻が23時以前であること、11歳に肥満であった場合、活動総時間が120分以上、夕食から就寝までの時間が3時間以上必要であることが示唆された。
25. 学童期から思春期の肥満に関連する生活習慣の検討 (第1報)	共	2018年10月	第39回日本肥満学会. 神戸	絹田皆子, 野口緑, 磯博康 他. 兵庫県尼崎市で実施している尼っこ健診の2017年度結果を用いて、11歳と14歳における生活習慣と肥満度との関連について、重回帰分析にて検討した。11歳と14歳の肥満予防には、11歳では、男女ともに入眠時刻が22時より早いこと、男子では、年齢に関わらず活動総時間は120分以上であることが有用と示唆された。また、女子については、肥満度が出生時体重と正の相関を示すことを確認した。
26. レセプト情報を用いた職域における大腸がん検診の感度・特異度の測定	共	2017年9月	第76回日本公衆衛生学会総会. 鹿児島	祖父江友孝, 絹田皆子, 村木功 他. 大腸がん検診の精度管理指標である感度、特異度を、職域にてレセプト情報を用いて測定した。職域におけることによって、感度、特異度を測定する方法は、医療機関へ精検結果を問い合わせることなく実施することが可能であり、がん登録との照合と比べて、むしろ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
27. 生活習慣病受賞化予防のための戦略研究：2年間の健診継続受診者のリスク因子の変化	共	2017年9月	第76回日本公衆衛生学会総会. 鹿児島	即時性に優ると考えられた。 野口緑, 絹田皆子, 磯博康 他. 自治体をクラスターとしたランダム化比較試験において、生活習慣病重症化ハイリスク者のうち、2年連続健診を受診した者の健診結果を比較し、受療行動促進モデルを用いた保健指導の有効性を検証した。介入群は対照群と比較して介入翌年の要医療項目に対する薬剤治療者割合が高く、高血圧群の血圧、糖尿病群のHbA1c、脂質異常群の血清LDL-chの平均値が低下し、重症化ハイリスク者全体の血圧、血清LDL-chの平均値が低下していた。
28. 生活習慣病受賞化予防のための戦略研究：保健指導実施状況別にみた医療機関累積受療率	共	2017年9月	第76回日本公衆衛生学会総会. 鹿児島	田中真理, 絹田皆子, 磯博康 他. 生活習慣病重症化ハイリスク者に対して行った受療行動促進モデルに基づく保健指導に関して、実施形態、実施時期、実施回数別にみた医療機関累積受療率との関連を検討した。重症化ハイリスク者の医療機関受療率を高める要因は、保健指導実施形態が訪問または面談、電話である、初回保健指導を45日以内に実施するなど初動を早める、保健指導を複数回実施することが示された。
29. 生活習慣病重症化予防のための戦略研究：受療率に影響する保健指導者の条件	共	2017年9月	第76回日本公衆衛生学会総会. 鹿児島	小島寿美, 絹田皆子, 磯博康 他. 受療行動促進モデルを用いた保健指導について、保健指導実施者の年齢等による医療機関累積受療率、介入前後の特定健診受診率、特定保健指導完了率の変化への影響について検証した。受療行動促進モデルによる保健指導は、保健指導者の1)職務についた通算年数が長い、2)保健師 3)受持ち人数が15人未満、が医療機関累積受療率を上昇させ、年代は影響しないことが示された。また、特定保健指導完了率は対照群に比べて介入群で上昇した。
30. 生活習慣病重症化予防のための戦略研究：J-HARPの主解析結果	共	2017年9月	第76回日本公衆衛生学会総会. 鹿児島	磯博康, 絹田皆子, 横山徹爾 他. 生活習慣病重症化ハイリスク者を対象として、受療行動促進モデルに基づく保健指導の有効性を検証し、健康や医療政策の立案に資する科学的なエビデンスを創出することを目的とし、重症化ハイリスク者に対して、受療行動促進モデルを用いた保健指導介入を実施した。重症化ハイリスク者に対する受療行動促進モデルを用いた保健指導は、医療機関への受療率の増加につながることが立証された。
31. 離島農村地域の健診における使用メディア媒体数と受診率向上との関連	共	2015年10月	第74回日本公衆衛生学会総会. 長崎	陣内裕成, 丸山(絹田)皆子, 磯博康 他. 離島・農村地域の健診受診勧奨面における受診券、チラシ、住民組織などのメディア媒体の活用と受診率向上との関連を調べた。メディア媒体数と受診率向上は、健診前と未受診者勧奨において有意に関連し、電話や訪問、広報誌、かかりつけ医からの情報などを組み合わせた勧奨が受診率向上に繋がっている可能性が示された。
32. 血清および食事中的αリノレン酸と要介護認知症発症に関するコホート内症例対照研究：CIRCS研究	共	2015年6月	第51回日本循環器病予防学会学術集会. 大阪	山岸良匡, 丸山(絹田)皆子, 磯博康 他. 血清および食事中的α-リノレン酸と要介護認知症発症との関連を明らかにすることを目的とした。α-リノレン酸は、食事摂取で評価した場合も、血清バイオマーカーとして評価した場合も、同様に要介護認知症発症と負の関連を示し、特にα-リノレン酸の最も低い群においてリスクが高いことが示された。
33. 非空腹時高血糖と病型別脳梗塞を含む循環器疾患発症との関連 (CIRCS).	共	2014年1月	第24回日本疫学会学術総会. 仙台	今野弘規, 丸山(絹田)皆子, 磯博康 他. 病型別脳梗塞を含む循環器疾患発症リスクと非空腹時高血糖との関連について、一般地域住民を対象に長期間循環器疾患の疫学調査を実施しているCIRCSにおいて検討した。非空腹時の高血糖は、境界群、糖尿病群いずれにおいても、梗塞性循環器疾患、特に脳梗塞、ラクナ梗塞発症との関連が示された。
34. ビタミンB群（ナイアシン、B6、B12、葉酸）と大腸がん発症との関連 (JACC Study).	共	2013年1月	第23回日本疫学会学術総会. 大阪	丸山(絹田)皆子, 磯博康, 玉腰暁子 他. 日本人のナイアシン、ビタミンB6、B12、葉酸と大腸がん発症との関連を検討した。男性では、ナイアシン、ビタミンB6の摂取量が多いほど大腸がん発症リスクが低い傾向がみられ、女性では、ナイアシンの摂取量が多いほど大腸がん発症リスクが低い傾向が見られた。ビタミンB6と大腸がん発症との関連では、摂取量が多いほど大腸がん発症リスクが低い傾向である点は先行研究と一致した。
35. 離島・農村地域における生活習慣病及び特定健診・特定保健	共	2012年10月	第71回 日本公衆衛生学会総会. 山口	丸山(絹田)皆子, 谷川武, 磯博康 他. 離島・農村地域の生活習慣病及び特定健診・特定保健指導の実態把握を行った。千葉県漁業地帯では高血圧有病率が高く、食塩摂取

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
指導の実態把握.				
36. 離島・農村地域における特定健診・特定保健指導の実施・達成状況の変化とその要因分析.	共	2011年10月	第70回 日本公衆衛生学会総会. 秋田	も多いため減塩対策が重要、糖尿病、肥満、メタボリックシンドロームの有病率が高い地域では、特定健診や特定保健指導の充実を図る。特定健診受診率・保健指導終了率向上では、マンパワーの充実、健診・保健指導の通知、日程、時間帯の工夫、電話・家庭訪問による受診勧奨等が有用であると考えられた。 丸山（絹田）皆子, 谷川武, 磯博康 他. 離島・農村地域の特定健診・特定保健指導の実施・達成状況の変化とその要因分析を行った。特定健診受診率・特定保健指導終了率に地域差があり、受診率の向上として、特に受診券の1か月前送付、受診日・時間・場所の指定、受診券を当日発行し後日確認するが挙げられた。特定保健指導終了率の向上には、結果説明会の利用、面接日の調整、訪問指導が、積極的支援に関しては保健師数の充実が大きく関与した。
37. The associations of dietary folate, vitamin B6 and B12 intakes with risk of sudden cardiac death: The Circulatory Risk in Communities Study (CIRCS).	共	2011年8月	19th International Epidemiological Association(IEA) World Congress of Epidemiology, Edinburgh	Maruyama(Kinuta) M, Ohira T, Iso H, et al. 一般地域住民を対象に長期間循環器疾患の疫学調査を実施しているCIRCSにおいて、Nested-Case Control Studyにより、食事からの葉酸、ビタミンB6、ビタミンB12摂取量と心臓突然死発症(SCD)との関連を分析した。葉酸摂取量が多いほど、SCDの発症リスクが低く、その関連は、マグネシウム、カルシウムを調整因子に加えた場合にも同様の結果であった。しかし、ビタミンB6、ビタミンB12摂取量とSCD発症との間には、有意な関連は認められなかった。食事からの葉酸摂取が、SCD発症に対して予防的に働く可能性が示唆された。
38. 食事からの葉酸、ビタミン B6、ビタミン B12摂取量と心臓突然死発症との関連.	共	2011年1月	第21回日本疫学学会総会. 札幌	丸山（絹田）皆子, 大平哲也, 磯博康 他. 一般地域住民を対象に長期間循環器疾患の疫学調査を実施しているCIRCSにおいて、Nested-Case Control Studyにより、食事からの葉酸、ビタミンB6、ビタミンB12摂取量と心臓突然死発症(SCD)との関連を分析した。葉酸摂取量が多いほど、SCDの発症リスクが低く、その関連は、マグネシウム、カルシウムを調整因子に加えた場合にも同様の結果であった。しかし、ビタミンB6、ビタミンB12摂取量とSCD発症との間には、有意な関連は認められなかった。食事からの葉酸摂取が、SCD発症に対して予防的に働く可能性が示唆された。
39. Trends in Sudden Cardiac Death and Its Risk Factors in Japan, from 1981 to 2005: The Circulatory Risk in Communities Study (CIRCS).	共	2010年3月	American Heart Association 50th Annual Conference on Cardiovascular Disease Epidemiology and Prevention, San Francisco, CA	Kinuta M, Ohira T, Iso H, et al. 一般地域住民を対象に長期間循環器疾患の疫学調査を実施しているCIRCSにおいて、1981～2005年までの心臓突然死(SCD)の発症率の推移とその要因について検討した。SCD発症率は、1981～1995年にかけて減少したが、1995～2005年は減少が止まるか増加に転じた。SCD発症のリスク要因となる高血圧有病率、喫煙と多量飲酒割合は減少していたが、肥満、脂質異常および糖尿病の有病率が増加していた。
40. 微量栄養補助飲料摂取の血管内皮機能への影響に関する介入研究.	共	2010年1月	第13回日本病態栄養学会. 京都	丸山 広達, 丸山(絹田) 皆子, 磯 博康 他. 過去1年間の健診でメタボリックシンドロームと診断された40～66歳男女125名とし（男86名、女39名）、性別に層化して介入群と対照群に無作為に分けた。介入群には、ブイクレス・ベリーズ（ニュートリー（株）：1本125ml中、ビタミンB6・5mg、B 12・10μg、C・500mg、葉酸・800μg）を2ヶ月間毎朝1本の飲用と日常生活維持を、対照群には日常生活維持のみを指示した。2ヶ月後に再検査をし、血管内皮機能の改善効果を比較分析した。血管内皮機能は、両群の比較から男性では有意でないものの改善傾向が認められたが、女性では改善傾向はみられなかった。
41. 長期間循環器疾患の疫学調査を実施している地域を対象とした心臓突然死の発症率の推移に関する研究.	共	2009年6月	第45回日本循環器病予防学会. 横浜	絹田皆子, 大平哲也, 磯博康 他. 一般地域住民を対象に長期間循環器疾患の疫学調査を実施しているCIRCSにおいて、1981～2005年までの心臓突然死(SCD)発症率の推移を検討した。わが国のSCD発症率は、1981～85年から1996～2000年にかけて継続的に減少したが、2001年以降、減少から増加に転じた。SCD発症率は、男性が高く、年齢が高くなるにつれて高かった。SCD発症とその季節との関係について、冬(12～2月)が他の季節と比べて高く、特に75～84歳では、冬に多く、夏は少なかった。
3. 総説				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3. 総説				
1. IoT技術を用いた家庭 血圧管理研究の5年間 の成果と時系列ビッ クデータ・AIを活用 した今後の展望：益 田研究。	共	2024年8月	岡山医学会雑誌. 2024;136(2):57- 62.	久松隆史, 絹田皆子, 神田秀幸 他. 益田市民におけるIoTを活用した家庭血圧管理研究(益田研究)を概 説、その5年間の成果として、高血圧有病者における高血圧に対する 認知率・治療率が大幅に向上したことは最大の成果と言える。さら に、経時的に収集された家庭血圧など様々な生体指標から時系列 ビッグデータを構築し、人工知能(AI)等を活用した将来展望につい て述べられた。
2. Coronary Artery Calcium in Assessment of Atherosclerotic Cardiovascular Disease Risk and its Role in Primary Prevention.	共	2023年10月	Journal of Atherosclerosis and Thrombosis. 2023;30(10):1289 -1302.	Hisamatsu T, Kinuta M. 冠動脈カルシウム(CAC)は、CT検査を使用して検出され、無症候性ア テローム性動脈硬化症の確立された指標である。欧米諸国と日本の 無症候性の地域集団におけるCACの疫学的エビデンスに焦点を当て た。また、アテローム性動脈硬化性心血管疾患(ASCVD)リスクを評価 するツールとしてのCACの有用性とASCVDの一次予防におけるその役 割について概説した。
3. Epidemiology of cardiovascular disease in Japan: An overview study.	共	2023年8月 15日	Journal of Cardiology. 2024;83(3):191- 200.	Ohira T, Eguchi E, Kinuta M, et al. 日本における心血管疾患死亡率および罹患率、それらに関連する問 題と対策について述べた総説である。人口動態調査統計データを使用し、心疾患における内訳病名別死亡率の県間比較とその課題点を 検証した研究論文(絹田, 他. 厚生指標. 2023;70(7):31-37)の結果 および図を提供した。
4. 【動脈硬化性疾患予 防のための食事療 法・生活指導】 V. 飲酒, アルコール.	共	2022年11月	臨床栄養. 2022; 141(6): 842-852.	絹田皆子, 神田秀幸. 日本動脈硬化学会「動脈硬化性疾患予防ガイドライン2022年版」の 発行に伴い、ガイドライン改訂のポイントの解説、動脈硬化性疾患 予防のための食事療法・生活指導として5つの項目を詳しく解説され た特集号である。「V. 飲酒, アルコール。」の執筆を担当した。
5. 【NCD(非感染性疾 患)対策】わが国の NCDリスクにかかわる 研究体制と対策の現 状	共	2014年5月	公衆衛生. 2014;78 (5):324-330.	今野 弘規, 丸山(絹田) 皆子, 磯 博康. NCD(非感染性疾患)対策の特集にて、前半はわが国で行われている NCDリスクに関するコホート研究や統合研究について概説し、後半で は、平成25(2013)年度に開始したNCDリスクに対する初の大規模な 地域介入研究となる厚生労働科学研究「生活習慣病重症化予防のた めの戦略研究」の概要を紹介した。
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 第14回日本循環器病 予防学会 奨励賞を 受賞して	単	2023年10月	日本循環器病予防 学会誌. 2023;58 (3):270-270.	絹田皆子. 第14回日本循環器病予防学会奨励賞を受賞した。受賞に際し、受賞 者として寄稿した。
2. 第33回日本循環器病 予防セミナーに参加 して得られたこと	単	2021年11月	日本循環器病予防 学会誌. 2021;56 (3):282-282.	絹田皆子. 第33回日本循環器病予防セミナーに参加した。当該セミナー実行委 員長から寄稿の依頼を受け、セミナーを通じて得られたことについ て寄稿した。
3. 武庫川女子大学卒業 生座談会。世界で活 躍する武庫女卒業 生一新たな挑戦一		2020年10月 31日	武庫川女子大学 女 性活躍総合研究所	登壇者; 掲載順 絹田皆子, 多田美晴氏, 横井利佳子氏, 吉本瑠巳氏. 武庫女卒業生の1人として、卒業後のキャリアパスおよびその過程で 直面した挑戦や得た学びについて説明し、現在従事している業務の 内容を専門的な観点から紹介した。その後、参加者と意見交換を行 い、質疑応答を通じて双方の理解を深めた。
4. 最新栄養学〔第10 版〕	共	2014年5月	建帛社. 担当部分: p661-p667	大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生学教室担当部分の著者; 掲載 順 池原賢代, 磯博康, 丸山(絹田) 皆子, 他. 「48. 動脈硬化性心血管疾患の部分」の翻訳について、該当教室の 教員と院生で担当することとなり、「植物由来のn-3系脂肪酸: α -リ ノレン酸」から「食事性コレステロール」までの翻訳を担当した。
6. 研究費の取得状況				
1. 循環器病・認知症予 防に向けた、機械学 習による新因子の解	共	2025年4月 2029年3月	日本学術振興会 科 学研究費助成事業 基盤研究(B)	神田秀幸, 久松隆史, 絹田皆子 他. 本研究は、地域住民の時系列の生活・健康情報と早期臓器障害デー タを用い、機械学習により循環器病や認知症の新たな予測因子を抽

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
明と個別最適化モデルの開発（分担）	共	2024年4月 2029年3月	日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	出し、高精度な個別最適化予測モデルの構築を目指すものである。
2. 高血圧予防のためのナトリウム・カリウムに影響を及ぼす食物に関する探索研究（分担）				中畑典子, 絹田皆子, 指宿りえ 他. 非接触型の栄養計算アプリを用いた食事調査を実施し、食事の習慣摂取量を食品および栄養素から把握する。家庭血圧値と食事との関連、ナトリウム量・カリウム量・ナトリウム/カリウム比について、経口摂取量と尿中排泄量との関連を明らかにする。地域特性を考慮した食品摂取バランス改善による高血圧予防策の確立が期待される。
3. 腸内細菌叢と認知機能・動脈硬化・フレイルに関する東西4コホート統合疫学研究（分担）	共	2023年4月 2027年3月	日本学術振興会 科学研究費 基盤研究（B）	久松隆史, 絹田皆子, 三浦克之 他. 健常一般住民を対象とした東西4つのコホートデータを統合し、腸内細菌叢組成と認知機能低下、画像検査に基づく脳領域別萎縮や潜在性動脈硬化(脳血管・冠動脈・大動脈・頸動脈)、フレイルとの関連を検討する。更にコホート比較から、これらの地域格差を明らかにし、格差の要因について腸内細菌叢組成を含め詳細に検討する。
4. 我が国の心臓突然死の長期推移と身体心理社会的因子の寄与率の時代変遷に関する研究（分担）	共	2023年4月 2027年3月	日本学術振興会 科学研究費 基盤研究（B）	大平哲也, 今野弘規, 絹田皆子 他. 長期間疫学研究を実施している地域を対象として、1981年以降40年間の心臓突然死の長期推移を明らかにし、1980年代から2010年代まで10年毎の4つのコホートを分析し、我が国の心臓突然死に関連する身体・心理・社会的因子の時代変遷を検討する。さらに、心臓突然死に関連する自律神経機能、血管内皮機能、炎症、心機能、睡眠呼吸障害、被災体験等、新規の危険因子を同定し、今後の心臓突然死予防対策に寄与する知見を得る。
5. 令和5年度ダイバーシティ推進本部「女性研究者派遣事業」	単	2023年4月 2024年2月	岡山大学	絹田皆子. 2023年6月18日～23日まで、留学予定先の訪問および研究打合せのため、University of California, Los Angeles, Fielding School of Public HealthのMay. C Wang 教授とDepartment of PsychologyのJanet.A Tomiyama教授を訪問した。これまで行ってきた研究内容や現在取り組んでいる研究報告、研究留学期間中の研究テーマについて指導・助言をいただいた。
6. 壮年期を対象とした伴走型血圧管理支援事業の役割と評価：社会的処方観点から（分担）	共	2022年4月～ 2026年3月	日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	福田茉莉, 神田秀幸, 絹田皆子 他. IoTを用いた年単位の家庭血圧管理事業が健康増進や疾病予防だけでなく、社会的処方として機能するかを検討する。家庭血圧管理事業の参加者への質問紙調査や支援スタッフを対象としたインタビュー調査、年間医療支出費の比較研究などを実施する。社会的処方の枠組みが、高血圧症等の疾病予防や健康増進に基づく地域実践に援用可能を検討し、医療的・人材的資源の乏しい地域に対する有効な社会的処方の実現に寄与すると考えられる。
7. 高校生eスポーツアスリートにおける心身の健康実態の解明（分担）	共	2021年4月～ 2024年3月	日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	神田秀幸, 宮崎亮, 絹田皆子 他. 高校生eスポーツアスリートと同じ高校に通う他部所属の高校生と比較し、高校生eスポーツアスリートの身体的・精神的な健康実態を、横断的および縦断的な疫学調査によって明らかにすることを目的とした。高校生eスポーツアスリートの健康課題の傾向が把握でき、今後は、横断的な調査および縦断的な調査を同時に行い、健康管理の方向性を検討する予定である。
8. 心臓突然死発症予防のための生活習慣の探索に関する疫学研究	共	2013年4月～ 2014年3月	財団法人 大阪難病研究財団 医学研究助成	絹田皆子, 大平哲也, 今野弘規 他. 1980～2010年までの心臓突然死の発症率の経年推移と、飲酒、喫煙、ならびに主要栄養素とそれら栄養素の摂り方の組み合わせ(スコア化)と、心臓突然死の発症との関連の分析を行った。1980～2010年までの心臓突然死発症率は、2006年以降漸減傾向にあることを認めた。飲酒、喫煙、主要栄養素摂取量と心臓突然死との間には明確な関連がみられなかった。
9. 非虚血性心臓突然死発症群の発症頻度とそのリスクファクターに関する研究	共	2010年1月～ 2010年12月	公益財団法人 総合健康推進財団 一般研究奨励助成事業	絹田皆子, 大平哲也, 磯博康 他. 長期間にわたり循環器疾患の疫学研究を実施している地域を対象に、非虚血性心臓突然死の頻度と推移を検討し、その危険因子をNested case-controlを用いて分析した。非虚血性心臓突然死の発症率は、1981～85年から1996～2000年にかけて継続的に低下したが、2001年以降その傾向は見られなかった。高血圧、喫煙、心電図ST-T異常、左室肥大(高電位)、心拍数が心臓突然死のリスクの上昇と関

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
				連した。
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		
1. 2023年7月～2025年6月		一般社団法人日本公衆衛生学会 代議員		
2. 2023年6月～2025年		一般社団法人日本疫学会 代議員		
3. 2023年5月11日～65歳評議員定年まで		一般社団法人日本循環器病予防学会 評議員		